

京都府史蹟名勝天然紀念物調查報告

第十一冊

相 樂 郡

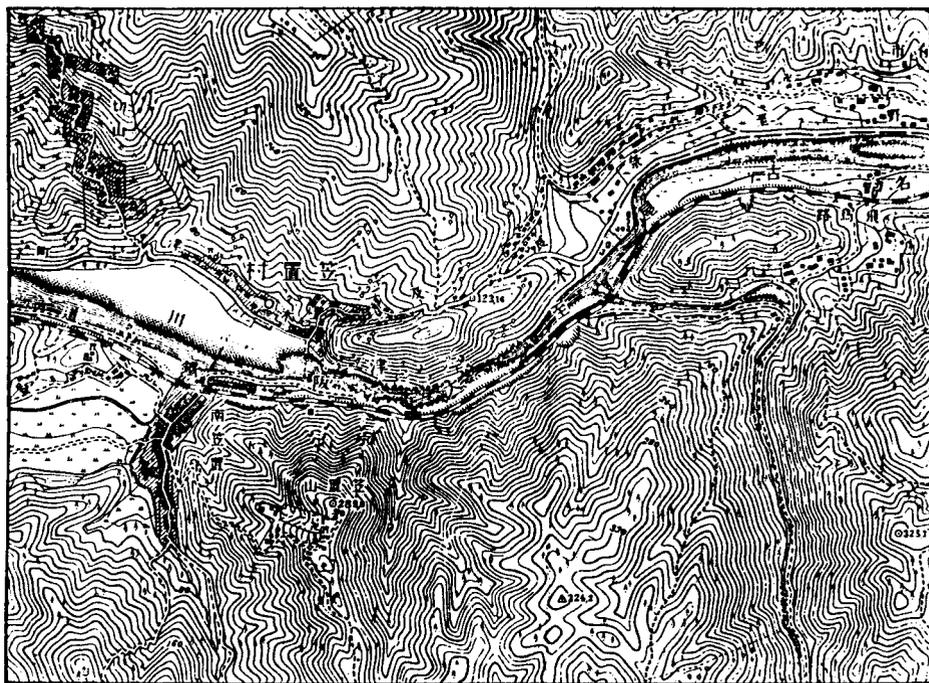
第三 笠置山の史蹟及名勝

〔圖版第一一—第一六〕

一、笠 置 山

笠置山の名は已に歴史の上にはあらはれて天下に著聞す、また其地雍南の景勝にして、山水の眺、四時よろしく名勝として世に彰はすべきものあり。近畿の山容を見るに、紀伊山脈の一支脈、南山城より大和東部に走るものを笠置山脈となす。此の山脈の中にあつて笠置山は京都府相樂郡の東南部に當り、標高二百八十九米餘なり。南方峰巒につゞいて大和國添上郡柳生村に接し、北は即ち山麓を洗つて木津川流る。笠置山の地は木津川對岸の地と共に笠置村大字笠置に屬し、砂浦濱神宮山、千手ヶ瀧、東山、芝崎、笠置山、大神田等の諸小字より成る。〔挿圖第一圖〕笠置山脈は火山脈にして笠置山の全山は主として花崗石を以て構成さる。

笠置山全山には松杉等の樹木翁鬱として繁茂し、所々に岩石露出し、或は相重り、其の高さ、幅各四十尺乃至五十尺に及ぶものありて、此等の中或石面には佛像を刻せり。又笠置石、平等石、貝吹石、太鼓石、搖ぎ石等と名づけられたるものあり。一帶に嶮岨なる所多く、「京羽二重大全」にも笠置山の峰そびえ谷深く樹木繁茂する山を記せり。又太平記、笠置寺縁起にも之を形容して載せ



第一圖 笠置山位置圖 (二分萬一)

たり。

此等の記事は笠置山が元弘の戦蹟となりしが爲に書かれたるものなるが笠置山の嶮岨にして谷の深きを云ひ鎌倉時代の歌人も之を詠じたり。

五月雨に水上まさる泉川かさきの山も雲かくれつゝ 俊成 (五社百首)

雲の上はその曉をまつほどやかさきの嶺に有明の月 (藤川記)

笠置山は吉野山の如く櫻多きにあらず、又高雄等の如く楓樹多きにあらず。されど常緑樹の間に僅に櫻樹あり。登山口にあるものは最も大なる老樹なりしが今やなし、春日花の頃深山の櫻として賞すべし。拾遺愚草には笠置山の櫻を詠じたる定家の一首あり。ちらすなよ笠置の山の櫻花おほふばかりの袖ならずとも

定家

紅葉樹亦點々としてあるを見る。元弘亂に後醍醐天皇此山に臨幸し給ひ、例年の都の紅葉に引きかへて此年は深山の紅葉を御覽せられてかくは詠じ給ひぬ。

うかりける身を秋風にさそはれて思はぬ山の紅葉をそみる

今は此山に櫻樹及び楓樹多數植ゑられたり。

笠置山への登山は笠置寺參詣と後世には後醍醐天皇行在所を訪ひ奉るが爲に相増すに至り之が爲に道路開けたり。登山口は山の東南部柳生街道にありて此處に石標二基樹てられ其の一は高さ七尺七寸にして三面に次の文字を刻す。

從是笠置山

登八町

(北面)

嘉永六癸丑歲夏五月三日建之

いが 石工 茂七

(西面)

大和屋 勘兵衛

發起

世話人

木屋 丈祐

木屋 清藏

(東面)

其二は高さ三尺六寸五分ありて、やはり三面に次の文字を刻す、

鹿鷲山笠置寺

(西面)

(梵字) 從是至寶前八町

(北面)

延寶七未天四月吉日

(東面)

今や此等二基の石標は登山口より少しく上りたる所にあり。さてこの登山口より八町にして

笠置寺に至るものなり。此道は舊道として今に存し下堂址を経て直に山上に出づるものにしてその距離近けれど峻険なり。今は登山口より少し登りたる所より舊道と分れて新に府道をつくられて廻轉式に上り得るなり。又大和柳生とも通じ往昔柳生侯は笠置山の西方今の大字笠置と飛鳥路との界を経て木津河岸に達したるものにして此道を俗に殿様街道と云へり。

二、木津川

木津川は山城四大河の一にして其源は伊賀國名張より發して其初を名張川と云ひ北流して上野近傍に於て西流する伊賀川と合して更に西流す。島ヶ原大河原を通り飛鳥路より少しく南方に迂回して笠置山の北麓を流れ加茂町木津町を経て北流し宇治川と合して淀川と成る。

木津川とは木津の里を流るゝが爲に名づけられしものにして別に山城川、泉川、挑川等の稱あり。木津川の笠置山下の地を流るゝ邊り、其の兩岸に岩石をばたち、或は峽流をなし河中に於ける岩石の配置妙を極む。(圖版一四ノ二)其の形狀によりて種々の名あり。北岸近く「まるい岩」「よぼ岩」「八疊岩」「夫婦岩」「かに岩」等あり。南岸に近く「屏風岩」「かはづ岩」あり。而して河流淵をなせる所を鹿ヶ淵と云ひ、昔時流岡のありし所なりと俗に傳ふ(圖版第一五ノ二)其他にも急湍淵瀬をなせる所ありて舟遊に快を覺えしむ。(圖版第一五ノ二)

芭蕉翁は元祿七年難波津への旅行にて伊賀より奈良への途中笠置に來り、此處より河船に乗りて下り「かさぎの峰は誠におしむべき秋の名殘なり」と云ひし事各務支考の笈日記九月八日の

條に見えたり。木津川より兩岸を見上げたる景佳なり。兩岸に上りて木津川を見下したる景亦佳なり。(圖版一四ノ一)笠置山頂船茶屋の邊りより東方木津川を見下したる眺望殊に秀でたり。此處より眺むれば泉川岨をめぐり、白浪巖を碎くの勢ありとは過言ならざるなり。張紅蘭の笠置山下作詩あり。

一簇人家水雨涯 鳴鑾迹沒草離々

春風吹濕青篔簹 寸々香魚上釣絲

笠置村は實に此川を隔て、南北に跨る、俗に北笠置、南笠置と云ふ。已に訶林拾葉集にも、

笠置山は川の南里は川の北南兩方にあり

と記せり。南笠置は先に述べし笠置山の地なるが、北笠置は笠置村小字西通堂ノ上、掛谷、東掛谷、大峯、上津、中通、峠、湯谷等の地を含む。河に沿ひて上野、奈良間を通ずる伊賀街道あり。北笠置の地形は北へ至るに従ひて次第に高く、杉、檜、松等常緑樹繁茂して笠置山木津川と共に風致を添ふるものなり。殊に小字峠、及中通の邊りは斷崖絶壁、岩石重疊し山水の妙を極むる所なり。

木津川の上流には其の南岸に水力電氣株式會社の施設ありて風致を少々害したりと雖も其の東方なる飛鳥路丸山に一小嶺ありて山容富士に似たるを以て俗に笠置富士と云ふ。河面にその全容を映じて西方よりの眺望よく實に笠置山名勝の東端を極むるものなり。(圖版一六)飛鳥路の邑民は元弘の亂に賊軍夜討の案内者として間道を攀ち上り城中に放火して勝利を得たるがその案内者の子孫は後世惡評を流したり。「ありのまゝ」と云ふ徳川時代の記録には次の如

く書けり。

其のてびきをせしものゝ子孫血脈を引きて今に癩病のものたえず、亦笠置飛鳥路は隣村なれども今もなほ婚姻をむすばず。したしきまじはりをさへせざるなり。余が遊びしは天明の頃なりしが皆謂ふ、ちかごろまでは交易をだにせざりしと云へり。まことに笠置は殷の頑民といへるにひとしく殊勝なる事なり。

民俗學上參考になるが現今に於てはかゝる事は全くなくなりて周圍の村落と互に交際せり。

三、笠置寺

笠置寺は笠置山上即ち笠置村大字笠置、小字笠置山の地にありて、始は法相宗なりしが、今新義真言宗に屬する二等格寺なり。笠置寺の草創は今昔物語に載せられ、又寺に天文七年書寫の笠置寺縁起ありて之を知る。此等に據れば天智天皇の御代大海人皇子は田獵を好み、山城國相樂郡賀茂郷の東なる山邊を狩り行くに山の斜に上りたる所を皇子駿馬に乗りて鹿を追ひて馳登りしに鹿俄に失せ岩に迫りて皇子落馬して共に死なんとせし折、歎きて山神助け給へ、然らば此巖のほとりに彌勒像を刻み奉らんと願を發す。其驗ありて馬退きて其時皇子馬より下りて被給へる蘭笠を脱ぎ置きて歸給ひぬ。其後數日を経て再び當山に登るに一羽の白鷺飛立ちて、先に置きし御笠の所在を示したり。皇子乃ち此石に彌勒の尊像を彫り給ふ。而して別に

溫當寺開山者發天武敕願所草創也、白鳳十一年辛未御建立云々天智天皇治十年辛未用之

鹿鷲山笠置寺の起原之なり。されど扶桑京華志には大津皇子此山に獵し山神の怒はげしく進退度を失ひし時虚空藏現出して皇子の難を救ふと云へり。「かさぎ」の名はかゝる説話より山來するものにして縁起には笠を置く事と鹿と鷲とを續けたる事との二要素を含み、笠置、鹿鷲、何れも「かさぎ」と訓む。伊呂波字類抄には笠置と書き、延喜内膳式には鹿鷲と記せり。又雍州府誌には「始號鹿鷲山云々」と。書言字考節用には笠置山を説明して「本字鹿鷲」と云へり。通常は山號には鹿鷲とかき寺號には笠置とかき且地理的に山全體或は地名として笠置山と云へるが如し。

笠置寺の開基創立者は笠置寺縁起には「天智天皇の御代皇子」とありて此は大海人皇子となせども或は大友皇子なるやも知れず。通常天武天皇白鳳十一年の創立と云へり、東大寺要録には笠置寺を説明して「右寺天智天皇第十三皇子建立」とあり。又女人往生聞書には天智天皇の建立と記し京師巡覽集扶桑京華誌には天武天皇第三皇子大津皇子の本願となせり、とにかく天智天皇の頃として取扱ひたるものなり。

以下笠置寺の沿革を笠置寺縁起によりて、他書にあるものは特に其の記録名を擧げて説明せん。

役優婆塞小角は神異不測の人にして日域の靈區を遍く修歴したりと傳へらるゝが白鳳十二年卯月廿四日當山に登り、千手窟に於て祕法を勤修したり。爾來本寺は修驗道の行場となり、吉野の奥大峰に擬したるものなりと云ふ。元來城南の地は南都の勢力範圍内にして、笠置寺亦南都の大寺殊に東大寺と關係ふかし。東大寺縁起によれば聖武天皇東大寺大佛殿を建立せらる

に當り、其の用材を伊賀國より取寄せらる。此等の材木は木津川を下せしも笠置山の麓には巨岩横はり、船筏通じ難し。天皇良辨を召して此を謀られ、良辨勅旨を受けて笠置寺の千手窟に籠り、千手の祕法を修行せらるゝに雨を降し材を通ずるを得たりと傳ふ。俗に笠置千手岩屋は良辨僧正行法の窟と云ふ。

又東大寺縁起によれば天平勝寶三年十月實忠和尚當山千手窟内に於て觀念の修法あり。而して此處に一字を建立し同四年正月朔日始めて此法を二七日勤修せられ十一面觀世音現妙色身を感じ得す、此即ち正月堂の基なり。又同年二月東大寺二月堂に於ても二七晝夜六時の行法を行はせらる。二月堂縁起によれば

天平勝寶三年實忠和尚笠置寺の龍穴より入りて北へ一里ばかり過ぐるに都率の内院なり
けり、

とあり。今猶東大寺二月堂に於ては毎年舊曆二月に修二會を勤修せるが、此には笠置寺より僧出て勤修に與りたり。此の如くにして笠置寺は南都東大寺と關係深く、終に東大寺續要録には其の末寺として笠置寺を載せらるゝに至れり。

平安朝時代になりて桓武天皇延暦十三年當寺に於て法華八講を行はせ給ひ、是日本第三傳の八講なりと云ふ。次いで弘仁年間には弘法大師當寺に來り虚空藏の寶前にて求聞持法し給ふ。昌泰年間には醍醐天皇登山せられ菅原道真之に従ひ之より此山に惣社祭られたり。栗栖宮は此時出來たるものなりと云ふ。延喜八年八月十二日吉野金峯山の日藏上人千手窟に參籠し三

部の秘法を勤修せり。かくて護法善神を勸請し當山の鎮守とし椿本大明神之なり。百練抄によれば永延元年十月十七日花山院は長谷寺笠置寺等七大寺に參詣されたり。かくて此頃の才媛清少納言はその著枕草紙に「寺はかさぎ」と書出したり。以て笠置寺の名高かりしを知るべし。安元二年には後白河法皇勸信によつて笠置寺に臨幸せらる。而して此頃二季の法華八講再興さる。即ち春季は後白河法皇の御勅願秋季は源賴朝の御願なり。安徳天皇壽永元年には田島拾町壹段佰捌拾步笠置寺不斷法華料として寄進さる。

鎌倉時代の初頭解脱上人貞慶來りて笠置山を中興し大伽藍となせり。貞慶の傳は元亨釋書を始め本朝高僧傳等に詳記せり。貞慶は左少辨藤原貞憲の子にして久壽二年に生れ出家して才譽あり。興福寺に學び壽永の初年には維摩會の主座に陞り、文治二年再び公選に充る。最勝講の詔に應じ講已に己みても還らず。笠置山窟に留りて名籍甚だ高し。東鑑によれば建久二年貞慶の笠置寺禮堂建立に當りては源賴朝沙金等を寄進したり。建久五年には貞慶山南の般若台院に六角堂を造り、釋迦佛を安置せり、春日大明神の御遷ありて守護に立たれ、玉葉にはその詠あり

我ゆかんゆきて守らん般若台釋迦の御法のあらんかきりは

なほ春日大明神と解脱上人とに關する傳説は海住山寺にもありて、影向松奥院は其の遺跡なりと傳ふ。建久五年五月二日の笠置寺住侶某の作善願文あり。建久七年貞慶は笠置寺中興の大願を發せられ子細を勸進帳に記し、諸檀那に助請せしに八條院之に讚し伊勢國蘇原の御厨の地

頭職を當寺に仰付けられたり。又此年には東大寺の重源によりて梵鐘が落成し後鳥羽院は勅宣を下して寺領の四至を次の如く定め漁獵を禁止し給ふ。

四至 東限野々目川 西限小倉川中佛石 南限阿多惠谷 北限勝示河原

此等の地名を現在の土地に就きて求むるに、野々目川とは笠置富士の麓即ち字丸山と平瀬山との間を流れ、その源は大和より發し今布目川と書けり。小倉川とは今大手橋を架せる往古川にしてその源は大和より發し上流は打瀧川を指すなるべく佛石なるもの何處にありや今は不明なり。阿多惠谷とは今柳生村にして笠置の有市ヶ谷に連れる處なり。而して勝示河原とは木津河畔にして岩に大日佛を刻し勝示佛と稱したりと云ふ。正治二年七月には爲八條院三位局於笠置修善願文なるものありて此は瑜伽論一部百卷を書寫供養したるものなり。元久元年十一月十七日貞慶は本堂に於て龍華會を行ひ此法の願文今に傳はれり。貞慶は一時承元二年より海住山寺に住せしが建曆三年二月五十九歳にして寂す。海住山寺奥院は解脱上人終焉の地と云はる。朝廷其徳を學びて解脱上人と謚し、世に笠置上人とも云ふ。

順徳天皇建保三年九月四日笠置の寺境に於いて畋獵をなすを嚴禁し給ふ。之を要するに笠置寺は平安朝中期より鎌倉時代に亙りては史書に記さるゝもの多く此頃最も榮え遺物の此時代に屬するもの多し。歌詠より見ても笠置寺の最も榮えたるは鎌倉時代を中心として見らるゝなり。

法の雨ふらぬ日もなきしるしにや笠を置きけん峯の山寺

正徹 (草根集)

河上やかさきのいはやけをさむみ苦をむしろならす優婆塞 好忠 (好忠家集)

今、笠置寺と海住山寺とを比ぶるに沿革所傳夫々相似たるものあり。即ち海住山寺も天武天皇の本願にして解脱上人中興せりと云はる。鎌倉幕府の末頃、執權北條高時の專權によりて後醍醐天皇は聖尋大僧正を頼み、元弘元年八月南都より、和東、鷲峯山を経て此山に臨幸せられ、上堂本堂を以て内裏となす。聖尋は笠置寺の別當にして東大寺東南院の法務なり。御供の公郷按察大納言、公敏、萬里小路中納言藤房、北畠中納言具行、二條道平の從父なる法印良忠等あり、侍には藤左衛門尉宗光、但馬左衛門重定を始め伊賀、伊勢、大和、河内等の武士を募りて警護し奉る。又東大寺の衆徒も警固す。後醍醐天皇笠置行幸の事に就きては神皇正統記、笠置寺縁起、太平記、保曆間記、興福寺略年代記、大乘院笠置日録、和漢合符、東寺五代記、新葉和歌集、元弘舊記、裏書、光明寺殘篇、神明鏡、大日本史等に明記せり。

之より先、叡山東坂本の合戦に六波羅の軍打負けしかば之を聞きて笠置寺警固は一入緊張したり。六波羅の賊軍從ひて此を圍み、太平記によれば

西ノ手ニ山陽道ノ兵三萬二千餘騎、木津川ヲノホリ二岸ノ上ナル岨道ヲ二手ニ分ケテ推シ寄ル、追手搦手都合七萬五千餘騎笠置ノ山ノ四方ニ三里ガ間ハ天地モ殘サズ充滿シタリ

とあり。官軍は極力之を防ぎしが賊軍は八月二十八日戌刻、終に城中に火を縱ち、八月三十日には笠置の寄手なる陶山、小見山、飛鳥路の邑民と語らひ、之を案内者として間道を通り、夜討せしと云ふ。鎌倉の賊軍未だ到らざるに官軍敗亡し、錦織飛驒判官源義繼、息義石以下十三人城中に於

て自殺し主上は神器を奉じ尊澄法親王と共に此山を後にして逃れさせ給ふ。太平記には

去程ニ類火東西ヨリ吹覆ヒテ餘烟皇居ニ懸リケレバ主上ヲ始メ進ラセテ宮卿相雲客皆徒跣ナル体ニテ何コヲ指ストモナク足ニ任セテ落行給フ、此人々始メ一二町ガ程コン主上ヲ扶進ラセテ前後ニ御供ヲモ申サレタリケレ、雨風烈シク道開ウシテ敵ノ聲此處ニ聞エケレバ次第ニ別々ニ成テ後ニハ只藤房、季房、二人キリ、外ハ主上ノ御手ヲ引進ラスル人モナシ、忝クモ十善ノ天子、玉體ヲ田夫野人ノ形ニ替サセ給ヒテソコトモ知ズ迷ヒ出サセ給ヒケル御有様コソ淺マシケレ、

と御痛はしき有様を記し奉れり。此時後醍醐天皇には

さして行く笠置の山を出しより天が下にはかくれ家もなし

と詠せられしかば藤原藤房之に答へ奉りて

いかにせんたのむ陰とて立よればなほ袖ぬらす松の下露

天皇は有王山に至りて、遂に賊軍なる山城國の住人深須五良入道、松井藏人の手に捕へさせられ、從臣、花山院師賢、北畠具行、萬里小路藤房等も皆捕へらる。かくて天皇には宇治より六波羅へ入らせられ、次いで隱岐島に御遷幸遊ばされたり。元弘の亂の兵火によりて笠置寺は一山殆んど焚燬し千手堂、六角堂、大湯屋のみ殘存せり。

元弘三年正月大塔宮、楠正成等吉野に兵を舉げられ、笠置の衆徒も粉骨の太刀打し三月十六日歸山したり。三月十九日宮は當山に逗留して二十三日南都へ向はれ、笠置の衆徒は野田口へ向

ひ、十三重の門を切破り打入りて在家を焼拂ひたり。六月十六日宮は京都へ還られ笠置の衆徒も召具されて御供して上洛したり。

後醍醐天皇重祚し給ふに及びて元弘三年七月九日笠置山へ恩賞の命あり。其後吉野朝廷よりも元弘三年八月十四日勅宣を奉じて本堂造立を企てしが成らず。永和二年三月十二日具秀朝臣南都を發して山城國笠置山へ登山せられし事は細々要記に次の如く記さる。

彼等去スル元弘元年、後醍醐帝皇居の時東國の凶徒焼拂ラハレヌ、其後建武二年御造營ノ御沙汰アルケル中、天下大亂ニツキ中途ニシテ造作ヲ止ム、其後亂逆不治ニヨツテ今ニ沙汰ナシ、今年南山ノ帝御領ニヨツテ造營ノ沙汰アリ。

具秀朝臣は巡見のため來られ紀州の山より材木を積み北畠殿より人夫を差向けらるゝ事をも記されたり。

笠置寺は室町時代に入りて永徳元年三月十一日再興の事なりしも應永五年籠所より火出て回録に罹り、烏有に歸したり。貞盛和尚之を憂ひ、文明十四年再建の舉ありて僅かに之を保持するを得たり。又文明十七年貞盛は再興勸進の爲下向せられたり。織田豊臣及び徳川の諸氏は寺院に朱印狀を出せしが笠置寺に對しては出さざりしものゝ如し。

徳川時代には元和五年より笠置の地は伊勢國津藩藤堂家の領域相樂郡五萬石の中に編入せられ香火を掌らしめたり。此時笠置寺の子院は勅願の名山一藩の支配に屬するを憤り、其復舊を幕府に願出て領主と葛藤を生じ數十年間紛争して解けず、幕府は之を領主に委したれば藤堂

氏に於ては本寺の古文書最重の什物を沒收し更に條件を立て、之を達し其の不服の頭目なる多門院、知足院を追放し一切領内の普通寺院としたり、天和二年九月藤堂家に於ては家老連署を以て笠置寺を處分せしが藤堂家に於ては本堂を建立し山林境内を寄附し、寺領として十五石を附し之を福壽院、知足院、不動院の三院に分置したり。且又僧糧として別々に修理料、掃除料、鐘撞料として田畠を附し、境内竹木代、年一貫三百目を寺の収入として之を保護したり。當時一山の私有地收入十五石ありしと云ふ。

正保五年秋には藤堂高次公笠置山に登山して笠置寺の衰頹を慨かれたり。公は貞享年間再び登山し僧に若干を賜ひ、貞享三年には竹木伐採の制札を出し以て維持の道を得たり。元祿年間には直指庵月潭禪師笠置山記を著し、又文政十年月には齋藤謙、名文を以て陪游笠置山記を書きたり。

明治四年廢藩置縣の事ありて還封の後は檀徒の維持する所となり明治九年丈英和尚大いに一山を興隆し漸く今日に至れり。

四、笠置寺の遺蹟

イ 石 佛

笠置山の頂上、笠置寺の寺地には山骨露れて巨岩怪石そばたち、高さ及幅各數十尺に及ぶものあり。此等の中の表面には彌勒、藥師、文殊、虚空藏等の佛像を刻したるが都名所圖會所載の圖に

は彌勒石、虚空藏石、藥師石あり。此等の中、虚空藏を除くの外は磨滅甚しく殆んど線刻を認めず、従ひて此等の製作年代も皆同時に成りたるものか、或は逐年的に成りしものか知るに由なきも、其の様式の或部分には藤原時代となすべきものあり。又小なるものにては足利時代に及ぶものあり、笠置寺の石佛に就きては未だ精細なる調査を聞かず。笠置寺に於ては、此等佛石は最も大切なるものなり。

彌勒石像

正月堂の側に高さ五十二尺、幅四十二尺にして南面し俗に彌勒石と呼ばるゝ大石あり。其の石面に彌勒尊像を刻し、笠置山の石佛中最も大なるものなり。刻されたる佛像の大きさに就きては山州名跡誌に次の如し。

彌勒石 西面高五間餘於巾横三間許、土際二間許、頂上一間餘、山爲後、西現彌佛像、立像八尺許。實際は之より少しく大なり。今之を拜するに光背の上頭部の切込深く、又台座の界線の稍明瞭に遺る外には尊容の如何なる様式なるやは見えす。蓋し風雨により磨滅し或は元弘の亂の兵火に遭ひて焼けたるものゝ如し。石面極めて細長き爲、立像なるを思はしむ。此の如き現状にあるを以て石佛そのものに就きて様式製作年代を考ふるに由なし。唯記録によりてその絶對年代を知るのみ。

久安五年五月十二日鳥羽法皇は得長壽院修理に際し、佛像を出し奉るべきかを問はせらる。此時左大將雅定卿權大納言伊通卿等答へて東大寺大佛は新に開眼の後鳥雀之を犯し、笠置の彌

勒は彩色を加ふるの後靈少しとの先例をひきて動すべからずと云へり。砂石集此事を記したり。笠置の彌勒とは此の石佛なるべく藤原時代にはこの彌勒石佛は已に存して一度は彩色を施され尊容美麗なりしものゝ如し。光明峯寺攝政家百首の中にも家隆の笠置の彌勒を詠じたるものあり。

佗人の涙の雨もあらしかし笠置の山の法のあさ日は

又三長記によれば元久三年四月後京極殿奥書の書寫法華經一部彌勒上生經等を此佛前に供養し貞慶導師たり。其の後元弘の亂には兵火に見舞はられ笠置寺縁起には

魔風しきりに吹て本たうの猛火本尊に覆ければ石像焼隔て、化人刻彫の尊容も埋没せり。淺猿敷事也。さりながらこの彌勒と申は金輪際より生出たる大石なれば僅に刻彫の像を元弘の秋の夜の煙にかくすと云へとも尊石は聊か恙なくして利生はますく龍花の春の曉を期給者也。

又鎌倉時代の作なる大和國宇陀郡大野なる彌勒石佛は笠置のそれを模したるものにして笠置の石佛の古きを知る。

さて此の彌勒石佛が笠置寺の本尊にして、縁起によれば天武天皇皇子に在しける時御狩して此尊容を刻す、爾來笠置寺の本尊となりしと云ふ、縁起には「本尊者觀多天之教主化人刻彫之石像也」と記し帝王編年記には天智帝甲子歲天人降りて此の石像彌勒を造りたるものとせり。又女人往生聞書には

カノ五丈石像ヲ彌勒ノマヘタカリアフヒデコレヲ禮拜ストイヘドモ壇ノ上ニハハバカリアリ

と、以てその信仰の一端を知るべし、我國に於ける彌勒の信仰は敏達天皇十三年、百濟國より、彌勒石像一軀送られたるを始めとし、源氏物語夕顔卷、日本靈異記、本朝法華驗記等に記され、榮花物語には志賀のみろくゑに參詣の記事あり。一大佛像として木彫及石像つくられ、笠置寺の石佛その一として擧ぐべく彌勒出世三會の曉を憧憬して笠置山はその一靈場たりしなり。

文珠石像

彌勒石の向つて左方にありて高さ二十二尺幅十六尺あり。俗に文珠石と云ひ石面に文珠尊像を刻したるものなるが今その線刻を認め難し。

藥師石像

文珠石の向つて左方に當りて崖上に突出する事約三十間石面高さ四十尺、幅三十一尺あり。俗に藥師石と稱へ藥師佛を刻したるも其の尊容認められず。

兩界曼荼羅石刻

俗に金剛界石、胎藏界石と云ふ二石より成り、前者は東面し高さ四十八尺、幅二十七尺、後者は南面し、高さ四十尺、幅三十三尺あり。往昔千手窟修法の時、金剛界、胎藏界の兩界曼荼羅を刻したるものなりと云ふ。

虚空藏石像(圖版一二ノ二)

前記彌勒石像より東北方五間を隔て、又兩界曼荼羅石刻の向つて右方にあり。南面して高さ四十二尺、幅二十四尺ありて俗に虚空藏石といひ石面に虚空藏菩薩を刻したり。尊容の線刻最も明瞭にして像は虚空藏院の虚空藏の如く座像にして、蓮辨台座上に座し鮮薄の衣を被寶冠を戴き左手は膝或は垂れ右手は印を結べり。寺の縁起によれば弘仁年中弘法大師當山に來りて此の石像の寶前に於て求聞持法し給ふと云ふ。

地藏石像

行在所趾の下方西面にありて尺餘の小佛なるが室町時代の様式を備へ次の如き銘文あり。

聖岩阿闍梨

天文三年七月十五日

般若台

鐘樓の西方約二町の地にある一岩石にして解脱上人、建久五年に六角堂を造り、釋迦佛を安置し又春日大明神を勸請せし所なりと云ふ。此寺の鐘にも笠置山般若台と刻され貞慶筆の彌勒講式、地藏講式何れも此台にて草せられたる事各その奥書にあり。

ロ 寺院堂塔

笠置寺の最も盛なる時には本堂、護摩堂、毘沙門堂、食堂、藥師堂、稻荷堂、千手堂等の佛堂あり。本堂は又正月堂とも云ひ、實忠和尚本願建立なり。今彌勒石像の前にあるは後の建造物なり。實は彌勒石の前には禮堂ありて元久二年之が建立には源頼朝奉加して砂金を賜へり。仁王堂は

麓、一の木戸口の邊にあり。院としては彌勒院、知足院、多聞院、誕生院、成就院、櫻院等あり。又僧房としては岩本坊、寶藏坊、上房、中坊、下坊等あり。然るに元弘の亂によりて堂舎、佛閣悉く燒拂はれたるが僅に千手堂、六角堂、大湯屋のみ残り。現在は正月堂の他に毘沙門堂、如意輪堂、庚申堂、大師堂、大藏堂、拏吉尼天堂あり。而して福壽院のみ塔頭の唯一として今遺り、笠置寺寺務所となり、既に亡びたる堂坊も字にその名を遺して大體その位置を知るを得るなり。其他此の山中には東福寺、安樂寺、長徳寺等ありき。

ハ 笠置寺鐘(圖版一、二、三)

笠置寺寺務所の向ひて右前に鐘樓あり、此に掲ぐる梵鐘は和鐘にして銅製、總高四尺五寸、口徑二尺二寸、縁の厚さ一寸八分あり、此の鐘に於て特異とする所は下縁に駒の爪がなく、六ヶ所の切れ込みありて六葉に擬し、六葉鐘とも云ふべし。六葉鐘の實例は他に、奈良市東大寺大勸進所及び山口縣佐波郡阿彌陀寺にありて何れも建久年間の鑄造なり。さてこの切れ込み各葉の底面に次の如き陰刻の銘文あり。

(梵字十四字) 阿謨迦吠嚕灑曩摩訶諫達摩尼鉢

(梵字十四字) 娜磨詰嚩羅鉢羅鉢羅嚩里多耶吽

諸行無常 是上滅法

生滅々已 寂滅爲樂

笠置山般若臺

新鑄華鐘 定根梵響

朝令衆生 發菩提心

建久七年^{丙辰}八月十五日 大和尚 南无阿彌陀佛

大和尚南無阿彌陀佛とは俊乗坊重源の事にして、貞慶と同じ頃に出て東大寺中興の名僧なり。此鐘はもと般若台院にありしと云はれ、その鑄造につきては次の如き傳説あり。山州名跡誌の文を掲ぐるに

此鐘ハ當寺ノ中興解脱上人一日靜坐ノ前ニ冥官ノ招請使來レリ、上人不能辭、應命、其到ルニ及ンデ冥使ノ云ク師暫ク閉目スベシト、即チ閉目ス、須臾ニ滔羅城ニ到レリ、請トイフハ師ヲシテ法會ノ導師トナサント、然シテ會終ルニ及ンデ王自ラ種々ノ珍施ヲ引ク、師辭シテ不受。中ニ一個ノ閻浮檀金アリ、其手ヲ携飯ル。然後彼金ヲ交テ所鑄造ノ鐘ナリ、

とありて之は貞慶の事に就きての傳なるが貞慶は生前閻魔宮に行きしてふ有名なる説話より轉化したるなり。事實は銘文にあるが如く大和尚南無阿彌陀佛、即ち重源の本願なり、明治四十二年四月五日付にて此鐘は國寶乙種に指定されたり。

ニ 文書記録類

笠置寺縁起

此は綴本にして其の奥書に「天文七年^{戊戌}卯月廿日書寫」とありて、その書風より見ても室町時代末期の書寫にして其の初に所謂笠置寺縁起なるもの漢文體にて載せ次には年代順箇條書にし

て元弘の亂までを漢文或は和文を交へて記し元弘亂は頗る詳しくかき太平記増鏡に類似せり、之を要するに三段の内容を有し後の二段は前一段に後世附加したるものならん。

彌勒講式 地藏講式

笠置寺の中興解脱上人の遺筆として紙本墨書の彌勒講式及地藏講式各一卷ありて、既に明治四十年五月廿七日に國寶乙種に指定されたり。彌勒講式の奥書次の如し。

建久七年二月十日於

笠置山般若臺草之

依并山仰也

願以此功德必仕慈尊矣

沙門貞慶

笠置山は既に述べたるが如く彌勒佛の一道場なれば此佛を念ずる彌勒講なるもの行はれ貞慶之に就きて其の法式、表白等を草したるものなり。以て此の功德を以て慈尊即ち彌勒佛に仕へん事を願ひたり。

地藏講式の奥書次の如し、

建久七年二月十七日

於笠置般若台草之

依小田原之仰願以此

功德奉資道矣

沙門貞慶

笠置寺には地藏佛も安置されしものゝ如し。されど其の古きもの今に傳はらず。貞慶はさきに彌勒講式を草したるが同月また地藏講式を草したるなり。奥書の中に小田原之仰とあるが此は相樂郡當尾村の小田原寺にして此地の字名亦小田原なり。小田原寺は後拾遺往生記元亨釋書等に記載あり。

なほ此講式を藏する箱は漆塗にして藤堂高睦の寄附したるものなり。その蓋は縦二尺四寸、横三寸三分にしてその表の繪は鶴龜を配したるものなり。箱書次の如し。

寄附山州相樂郡鹿鷲山

笠置寺

寶永元年歲次鄉瑯

林鐘上弦從四位下

伊賀侍從

藤堂大學頭藤原

高睦

ホ 石 塔

笠置山石佛の存する邊りには五輪塔寶篋院塔或は重塔等の石塔を見る。其の中の或ものは

原位置を換へ、或は構造組合を變じ或は堂の礎石等に用ひられたるあり、此等の中、古きは鎌倉時代に屬し、室町時代以降に及ぶ。

一、元應元年寶篋院塔

彌勒石の前、正月堂の側にあり。總高約六尺なるが此が組合は全部初のものなるやは疑はしきも台は原のものにして高さ一尺五分、幅一尺八寸七分ありて、容易に判讀し難きが次の如き銘文あり。

元應元年巳

七月十五日

大願主□□

元應元年と云へば後醍醐天皇御即位の年に當り、此の年の四月廿八日に改元されたり。

一、十三重石塔(圖版一三ノ二)

藥師石の前方にありて鎌倉時代の様式にして最下層の四面に佛を刻し、その手法稍佳なり。之は解脱上人母儀のために建てられしと云はれ、又元弘役戰死者の供養の爲なりとも云はる。

一、貞慶の墓(圖版一三ノ三)

笠置寺より東方溪を隔て、五町の處、宇東山の山林中に俗に上人墓と云はる、石塔あり。此處には五輪石塔四基相並び此中最も、手前のも、即ち最西のものを貞慶の墓なりと云ふ。石塔は様式上鎌倉時代のものとして差支なきものなり。寺務所の前に貞慶墓への石標ありて此は

勿論徳川時代中期若しくは末期のものなるが次の如く刻せり。

(梵字) 従是東有解脱之廟

へ、笠置山城

笠置寺の縁起に曰く

彼笠置の城と申は山高くして谷ふかし、つゞらおりなる道を廻て登る事二十八町、岩を切て堀とし石をたゞみて塀とせり。

又曰く

彼笠置山は日本第一の城廓也、高山峨々と聳て、峯は雲にかくれ深谷嶮々と沈て麓は霧に籠れり。道路狭くして巖の腹をつたふ。たかく登る事咸陽宮の構をなす。

笠置山は元弘亂には天險を利用して山城と成り、日本無雙の城郭とまで云はれたり。勿論臨時的のものにして後世見るが如き獨立したる一城郭にてはあらざりしなり。鎌倉時代より南北朝時代に互りて寺院の城郭となりしもの少からず。高雄神護寺比叡山延暦寺河内觀心寺或は高野山金剛峯寺の如きものあり、笠置寺も其の一例と見るべく笠置山の形勝の地なりし事寺坊も相当多く數多の住僧ありし事、名僧の頼むべきものありし事等に於て後醍醐天皇も一時此山に據り給ひしと拜察するなり。

さて笠置山城の本丸は彌勒石の上の方、西北の隅にして二の丸との間には溝を設け甚だ狭く、且小規模のものなり。此處に上堂本堂ありて内裏とせられたり。今此地三百餘坪を官有地と

定めて行在所趾として保存さる。木津川に臨みて高さ二十五尺幅二十尺の自然石の石標を建てその面に二品彰仁親王の書によりて一字の大きさ四尺五寸の大字を以て行宮遺址と刻せり。

(圖版第一二)

寺坊は將士の屯營とし或は道路繞門等をつくり、寺域の周圍には柵を繞らしたるものなるべし、今石佛のあるあたり道路の石面に抗柱をうがちし孔遺れり、一の城門は麓より數町上りたる所にして仁王門趾の少しく下方に當り、足助次郎が遠矢を射たりし所はその坂本にありと云ふ。なほ寺には笠置山元弘亂の陣營配置の古戦場の古地圖あり、而して此には次の如き筆あり。

笠置山之城

元弘戰全圖

并四方手配堅固圖

元弘元辛未九月築之

應永十四年閏五月十六日畫

康曆二庚申年八月二日畫

納當寺寶庫者也

笠置寺公文僧龍藏院 式部卿貞繁 在判

(別筆) 南山隊長

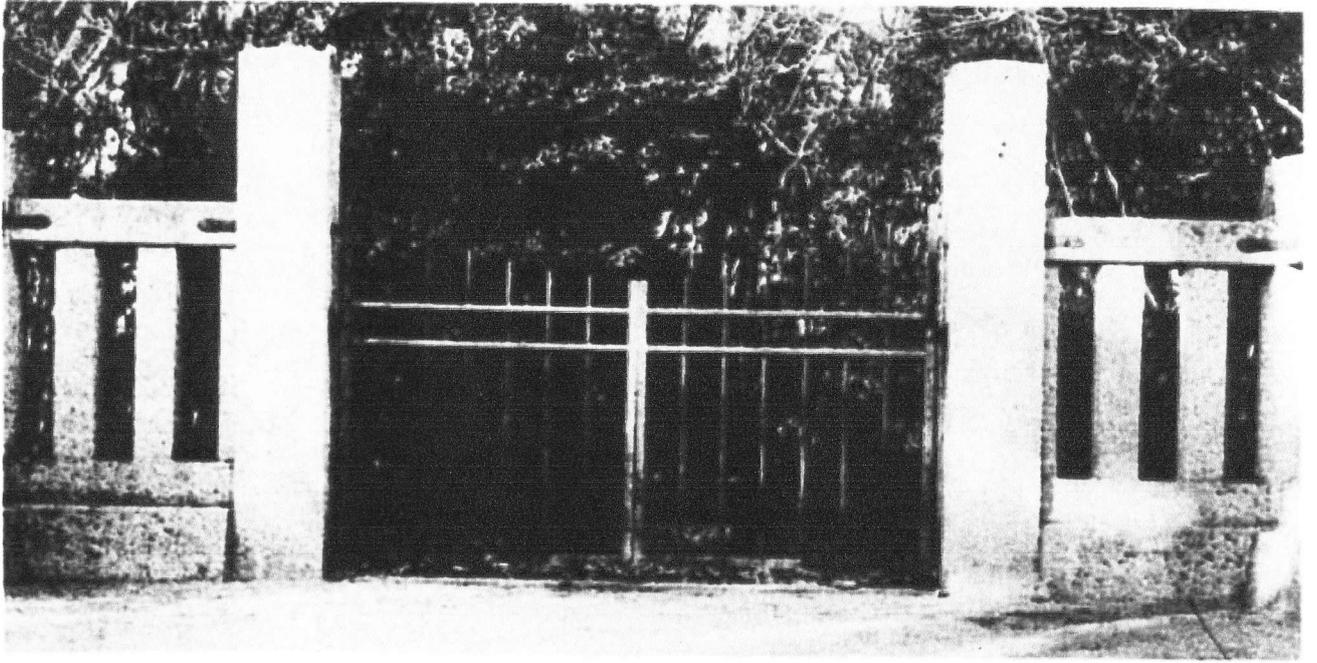
吉田木工源重義藏

此配置圖の内容は或程度迄、其の眞を認むべきも餘りに大規模複雑を極めたり、されど全然捨つべきものにあらず。此地圖もと湊河神社にありしを寫したりと雖も、恐らく椿井家に於て製作せられし偽古圖に類すべきものなり。かゝるものは徳川時代軍學の教材として用ひられたる事多し。

五、結 語

笠置山は實に王朝時代以來の佛蹟にして解脱上人の偉業を傳へ彌勒尊像以下の石佛在して我が佛教史上の一靈域なると同時に我が國美術史上の一參考地なり。殊に北條氏討伐を御企給ひし後醍醐天皇の臨幸せられて一時行在所となりて以來は所謂我が南北朝時代に於ける一史蹟として我國民の永く忘るべからざるの所なり。

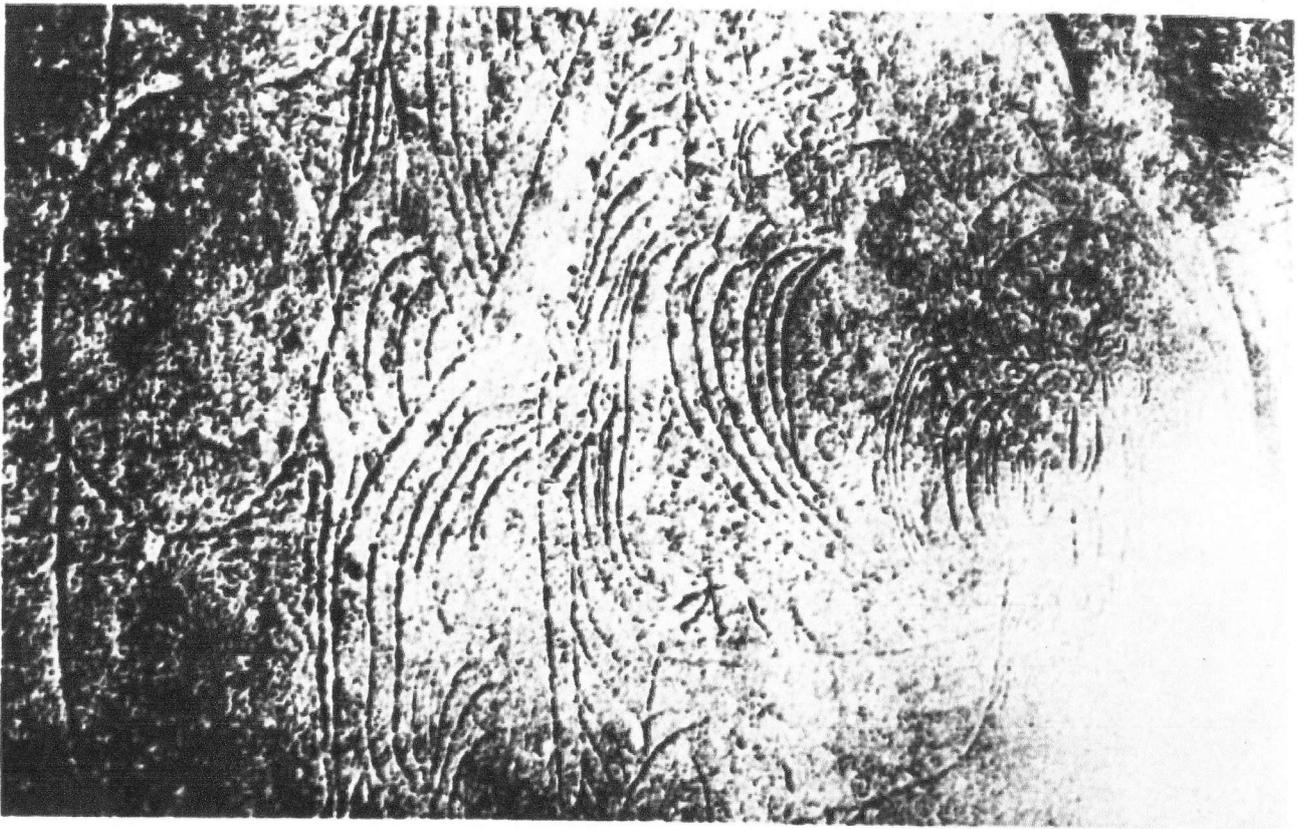
さなきだに笠置山は怪石重疊し且又其の木石の奇景は木津川の清流と相俟ちて實に近畿に於ける名勝の地にして古來此地に遊ぶ者尠からず、近時登山者著しく増加したる爲め、自然之に應ずる各種の設備を計劃するの勢となり、其の結果動もすれば此の名山の風致を害するの虞を生ぜり。かくては史蹟名勝の保存上支障を生ずるものにして笠置村當局に於ては之が對策に腐心し目下京都府に於ては史蹟名勝天然記念物保存法第一條に依り史蹟及名勝に指定せられんことを申請中なり。(佐藤委員)



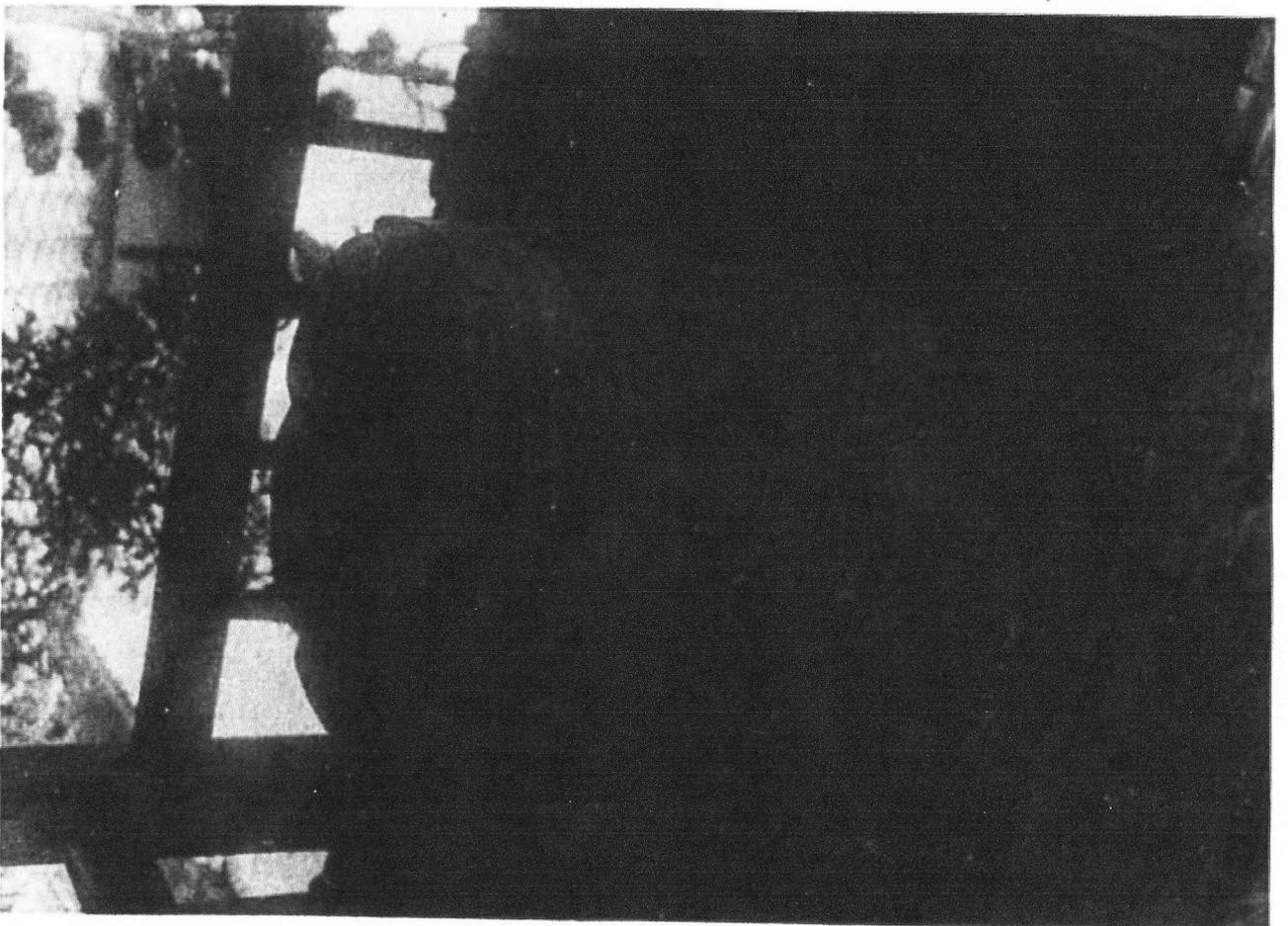
圖版 第一一 (相樂郡笠置山)



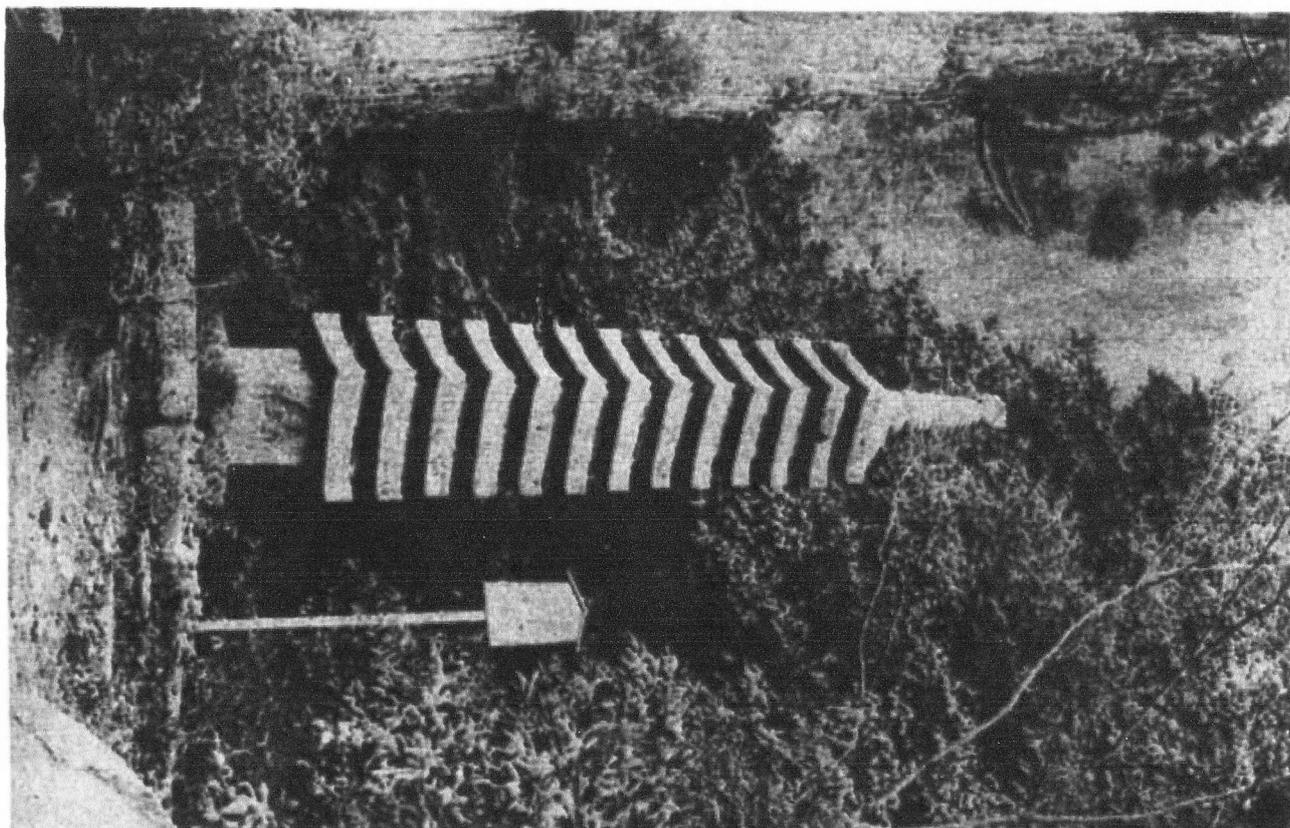
(二) 同上石標 (彰仁親王書)



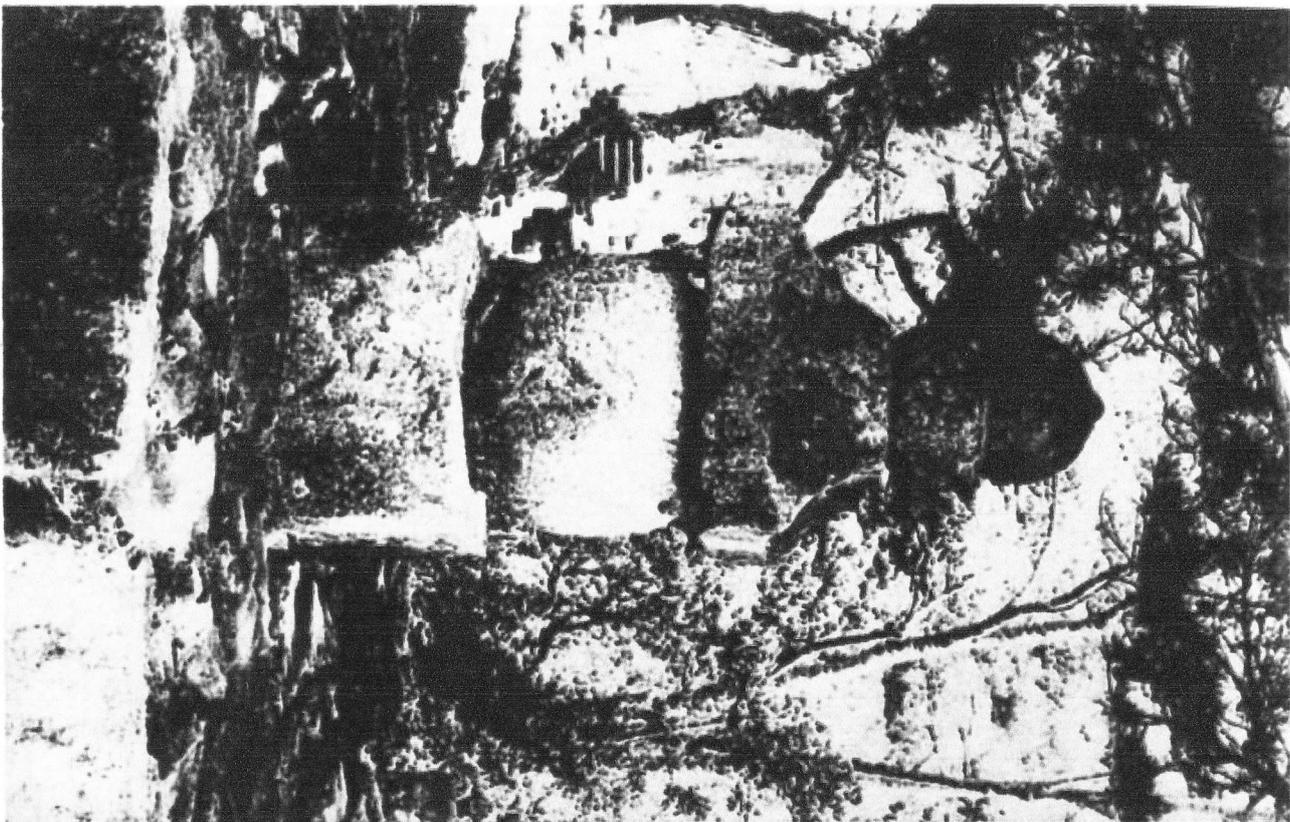
(二) 笠置寺石佛 (虛空藏尊)



(一) 笠置寺鐘



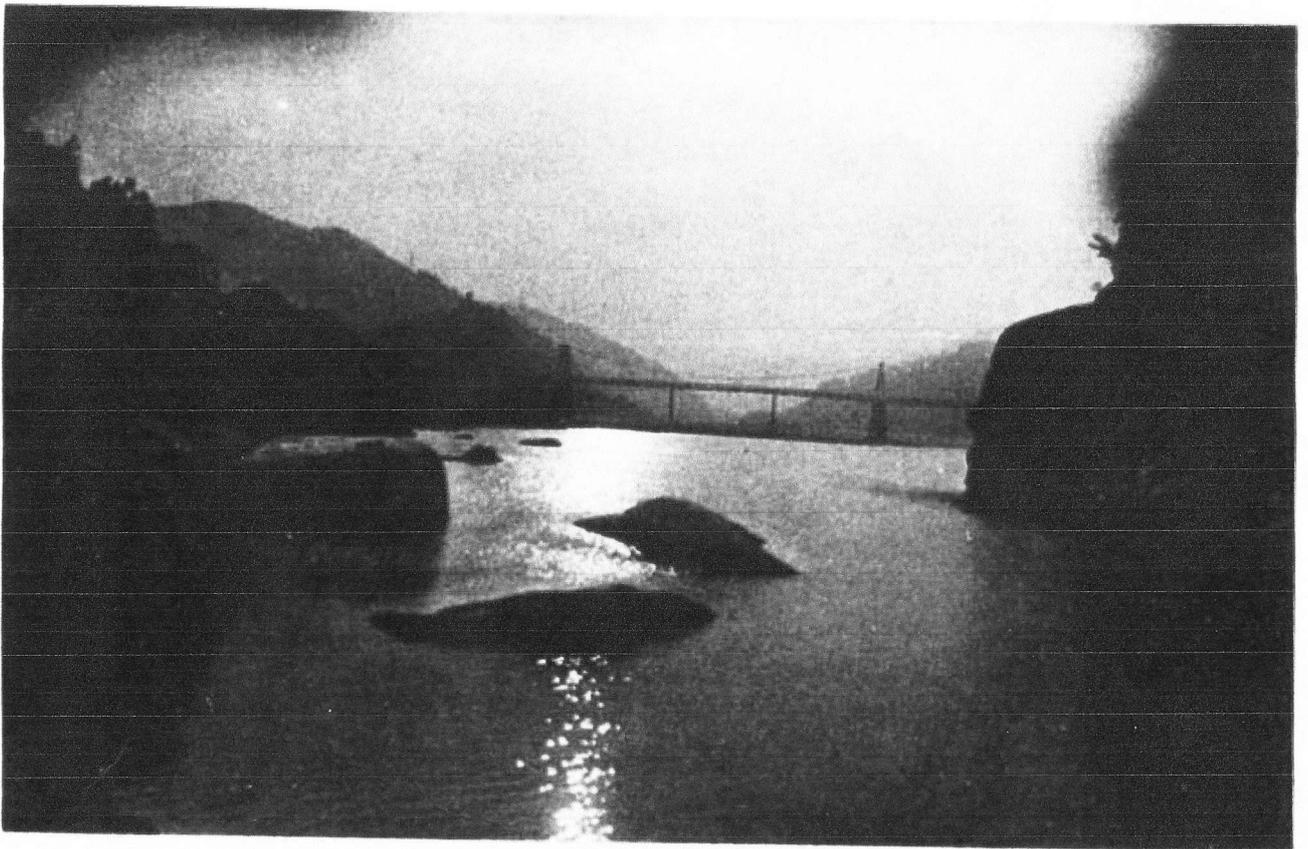
(一) 笠置寺十三重石塔



(二) 同 解脫上人墓參考地



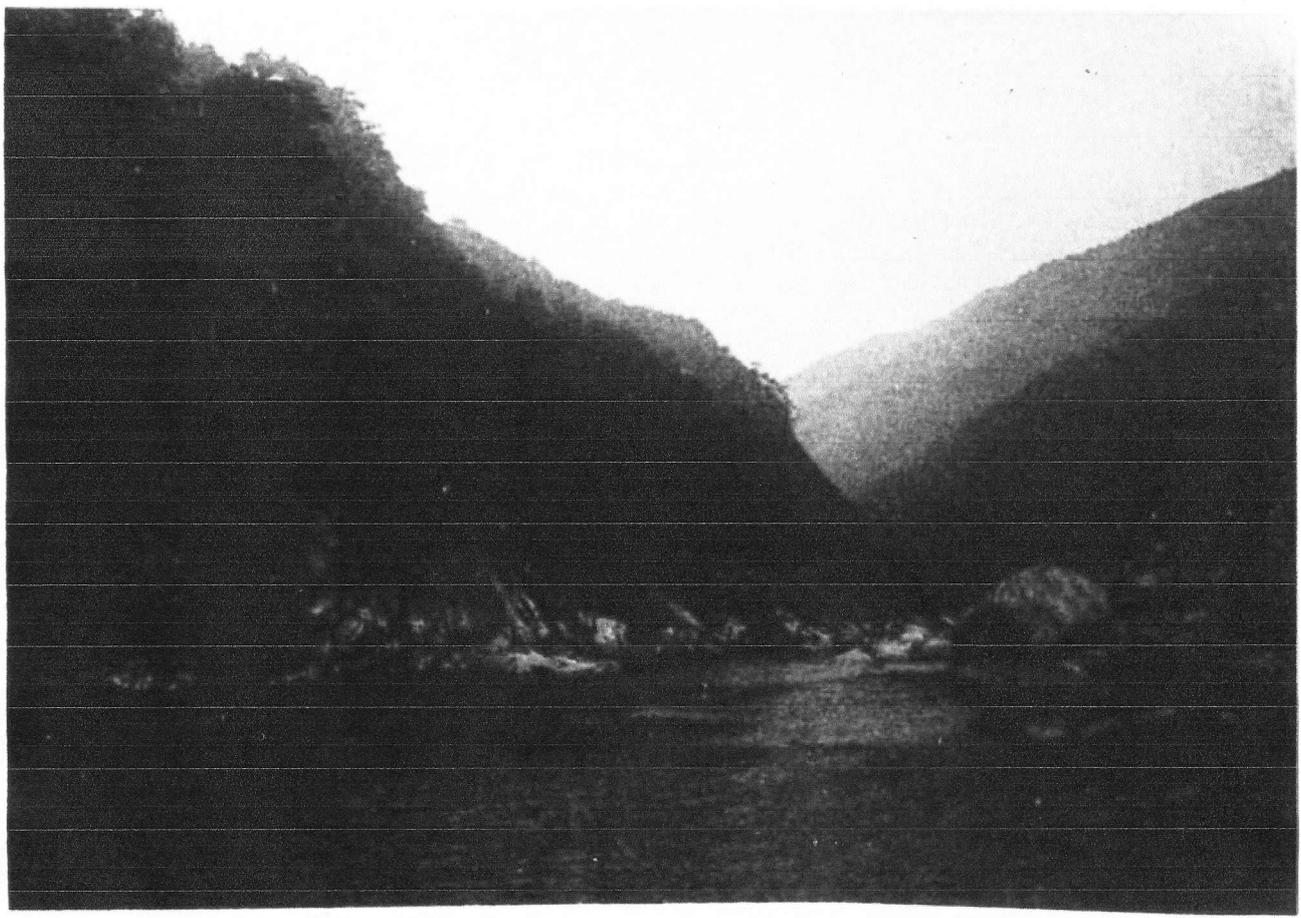
(一) 笠置山上 (船茶屋) マツ木津川ヲ俯瞰ス



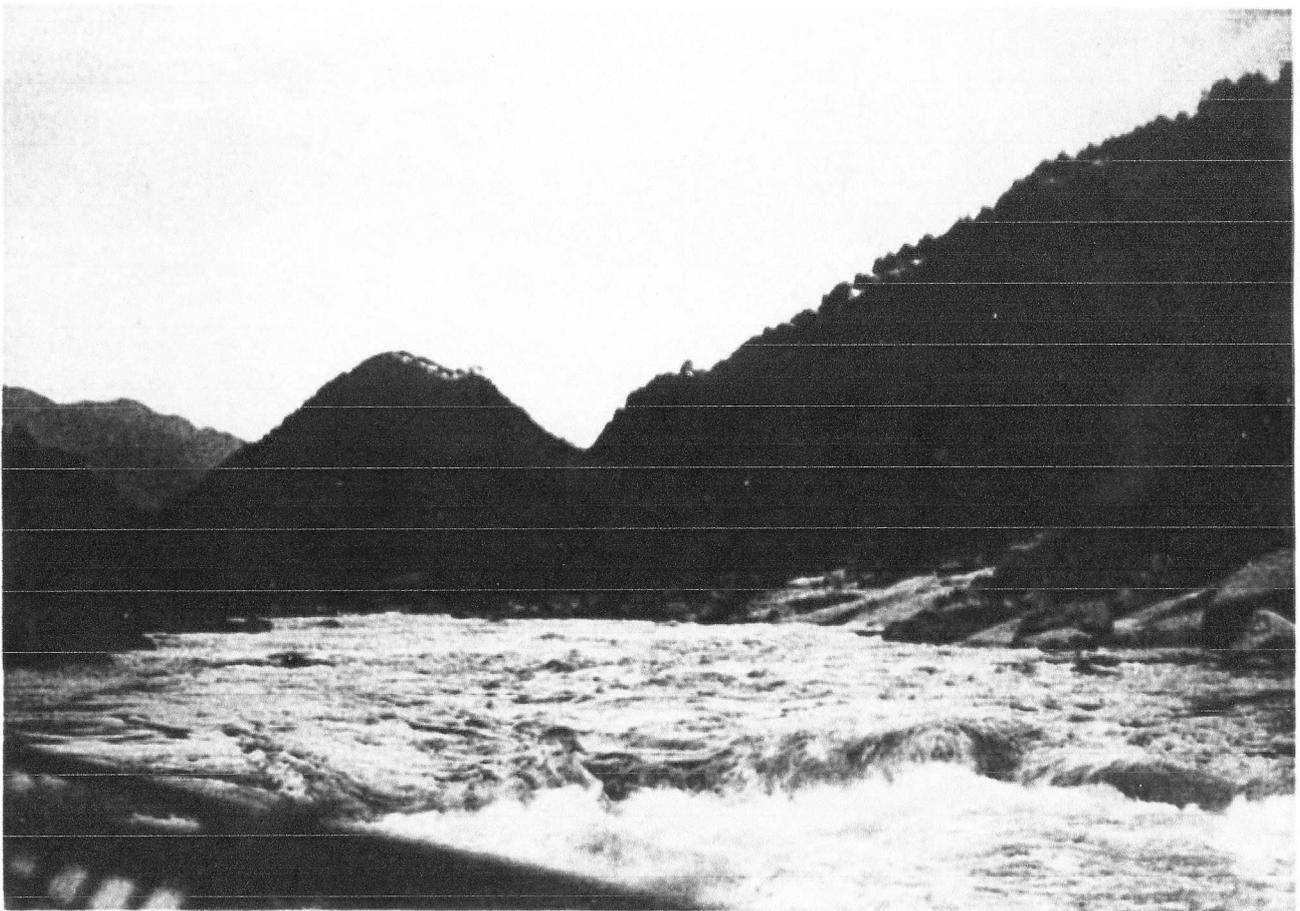
(二) 木津川夕照ノ景

本津川鹿ヶ洞

(二) 同上 上流



圖版 第一五 (相模郡笠置山)



昭和五年三月二十日印刷
昭和五年三月廿五日發行

京 都 府

京都市下京區北小路通新町西入

印刷者 須 磨 勘 兵 衛

京都市下京區西洞院七條南入

印刷所 内外出版印刷株式會社